# 富の神明さま（とめ）

発行所
三富、富岡総鎮守
神明社
社報第２号

〒359-0002
所沢市中富1507
社務所電話
04-2943-1709
宮司宅電話
049-259-2228

竣工なった社殿、狛犬

## 新年のご挨拶

宮司　林　伊佐雄

新年明けましておめでとうございます。

新春にあたり氏子崇敬会の皆様方のご多幸とご健勝をお祈り申し上げます。

御皇室におかれましては、昨年九月六日に悠仁親王殿下がご誕生になられました。親王殿下のお健やかなご成長と、皇室の弥栄を言祝ぎお祈り申し上げます。

さて、当神明社は、昨年から三ヶ年に亘り神社本庁より埼玉県で唯一「第十一期神社振興対策教化モデル神社」の指定を受けました。初年度は、阿部総代会長様を中心に幾度となく会議を重ね事業計画を練り、崇敬会、婦人会、青年会を結成させていただき、社報の発行、そして十一月には、地場産業の育成と川越いも作り初めの祖である吉田弥右衛門の顕彰を目的に、青木昆陽と併せて境内に二柱の神様をお祀りさせていただきました。

なでいも

遷座祭に際しましては大変大勢の皆様方にご支援ご協力いただきましたことに心より感謝申し上げます。また、氏子の皆様方には神社本庁指定「教化モデル神社事業」に赤誠のご奉賛を賜り厚く御礼申し上げます。

この度、初めて新たな神様をお祀りさせていただく遷座祭を斎行させていただきました。多くの方との出会いと協力を得て、はじめてできたことであり、そこに目に見えない神の深い意志と力を感じました。私達が二柱の神様をお祀りしたのではなく、神様のお導きによって神明社の地にお遷りいただいたように思われます。

多くの人の力が一つ所に、一つ時に集中されて神が誕生し、神話が生まれ、新しい世界が開闢した。心の中に神の鼓動が聞こえ、新たな熱い血が流れ始め、生きる力がふつふつと湧き上がって来るのを祭典中感じました。

新しく誕生した神様をお守りし、御神徳を広めさせて頂くのがこれからの使命だと感じております。初心に返って神明に奉仕する所存でございますので、今後とも、これまで以上に御指導御鞭撻宜しくお願い申し上げます。

## 新年のご挨拶

総代会長　阿部征一

新年明けましておめでとうございます。氏子並びに崇敬会の皆様には、健やかに新しい年をお迎えいただいたものとお慶び申し上げます。

さて、昨年当神明社は、神社本庁より埼玉県で唯一「第十一期神社振興対策教化モデル神社」の指定を受けました。それを受けて早速、崇敬会、婦人会、青年会を結成し、社報も発行させていただきました。

十一月には、地場産業の育成と川越いも作り初めの祖である吉田弥右衛門さんの顕彰を兼ねて、境内社にお祀りさせていただきました。遷座祭に際しましては大変大勢の皆様方にご支援ご協力いただいたことに心より感謝申し上げます。また、氏子の皆様方にはこうした事業に赤誠のご奉賛を賜りましたこと心より厚く御礼申し上げます。

特に今回の事業に対しては、ＮＨＫテレビでのニュースや朝日、産経、埼玉新聞各社に記事として取り上げていただきました。あらためて周囲の皆様の高い関心に驚いているところでございます。指定期間はまだ二年間残っているわけですが、少しでも社頭発展のために尽力させていただく所存でございますので、本年も皆様方のご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

## 川越いも開拓の祖
# 吉田弥右衛門御遷座事業
### 『川越いも』作り初め二五五周年記念

十一月二十三日（木）午後五時より宵闇の中、吉田弥右衛門（主祭神）、青木昆陽（配祀神）を当神明社にお祀りする遷座祭（いも祭り）が斎行されました。

（主催、神明社氏子崇敬会、婦人会、青年会。賛同、吉田徹四郎様。協力、三芳町甘藷同好会。後援、三芳町川越いも振興会、（社）小江戸川越観光協会、川越サツマイモ商品振興会、所沢市観光協会）

参列者は手水を済ませ、阿部総代会長を先導に祭祀舞奉納の小学生、祭主、来賓、総代、一般参列者と続き神前まで参進。狛犬、撫でいもの除幕後、清祓いを行い、新築された御社殿の御扉を開扉（かいひ）し、降神の儀にて吉田弥右衛門之命、青木昆陽之命の二柱の神様にお遷りいただきました。

祝詞奏上後、地元小学生二十名によって神前にて豊栄舞（とよさかまい）、朝日舞（あさひまい）、浦安舞（うらやすのまい）の奉納が行われ、続いて関係者の玉串の奉奠により、無事神事は執り行われました。

この後、場所を神楽殿前に移し、式典の前に三芳町甘藷同好会、婦人会の皆さんの手によって作っていただいた、心のこもったサツマ団子、芋汁をいただき直会とさせていただきました。

式典では、主催者を代表して阿部総代会長、林孝次名誉宮司、続いてご来賓の皆様よりご挨拶を頂戴しました。

ご来賓の皆様は、左記の通りです。

吉田弥右衛門御子孫吉田徹四郎、浩明様、川越いも友の会会長ベーリ・ドウエル様、川越サツマイモ商品振興会会長戸田周一様、三芳町川越いも振興会会長武田功様、三芳町甘藷同好会顧問小野沢栄次郎様、撫でいも・狛犬制作者鋳物師鈴木文吾様、紙芝居制作者渡辺弘子様・代田知子様。

式典後、紙芝居『吉田弥右衛門物語』（『とめのいものはじまり』）、上富囃子保存会によるお囃子（『富の丹精』）の奉納が行われ、むすびに『いもどっかえ』の儀式によってすべての行事を終了いたしました。

祭典は、宵闇の中、かがり火、小学生の作成した提灯、そして鎮守の杉木立をライトアップしたわずかの照明の中、厳粛幽玄のうちに行われました。中でも祭祀舞の奉納は、華麗さと荘重さで祭儀をより一層盛り上げて

くれ、参列者も大きな感動を持って鑑賞していました。

江森茂代先生（埼玉県神社庁祭祀舞講師）には、前回に続き遠路深谷より七回にわたって当地にご指導にお越しいただきました。子供達も先生の指導の下、寒い拝殿にて懸命に毎夜練習を重ね、素晴らしい舞を披露してくれました。

また、紙芝居『吉田弥右衛門物語』は、渡辺様、代田様によって制作していただいたものですが、川越いもの作り初めについて多くの子供達に知っていただくように、各小中学校に教材として寄贈させていただく予定です。

上富囃子保存会でも、新たに段物『富の丹精』を創作していただきご奉納していただきました。四季を通してのサツマイモ作りの苦労と喜びを笑いの中に物語化したもので、一つの新しい文化の創造であり、今後機会があれば各地で上演されることを期待しています。

ご遷座にあたりサツマイモの神様らしく、社殿前に撫でいも、サツマイモを抱いた狛犬の奉納をさせていただきました。制作は、東京オリンピックで聖火台を作られた鋳物師鈴木文吾氏の監修により川口鋳物研究会にお願い致しました。鈴木文吾氏のお父さんは上野の西郷像を制作された方です。先生には幾たびか当神明社に足をお運びいただき、当日も入院先の病院から抜け出して駆けつけていただきました。

『いもどっかえ（いも取り替え）』という儀式は、他地方で行われている『ナスどっかえ』という行事を参考にさせていただきました。夏になり神前に新しいナスを奉納し、すでに奉納してあるナスと取り替えて持ち帰り、家族そろってそのナスをいただくことによって、その夏を無病息災、家内安全で過ごせるという信仰に基づくものです。

十月九日は当神明社の例祭日であり、来年以降その近辺に『いも祭り』を斎行し、撫でいもを撫でて無病息災を祈念していただき、『いもどっかえ』が普及浸透していくことを願っています。

また、撫でいもの台座の社号銘板『甘藷（いも）

(1) 阿部総代会長を先導に参進

(2) 狛犬、なでいもの除幕

(3) 狛犬、なでいもの清祓い

(4) 降神後の祝詞奏上

乃神（のかみ）』は、現埼玉県神社庁長、秩父神社宮司蘭田稔先生に揮毫していただいたものです。先生は、東京大学、京都大学、國學院大學で教鞭を執られた世界的に著名な神道、宗教学者です。大変公務ご多忙中にもかかわらず、時間をお取りいただき、その他にご神酒のラベルの『富乃神明』も揮毫していただき、それぞれ掛け軸にさせていたき当社のご神宝にさせていただきたく思います。

大勢の皆様のご協力があって、はじめてこの度の遷座祭が盛大に厳粛のうちに行えました。関係各位の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。

祭祀舞の奉納をしていただいたお子さんは左記の通りです。（敬称略、順不同）

六年生・鈴木光。五年生・橘里菜、島田悠喜美、新井玲美、松浦葵、早川千芙由、斉藤芙美、加羽澤光甫、滝本裕貴、林小百合。四年生・井田絵里香、大木実紀、瀬島かほ、飯塚香寿乃、小山理奈。二年生・金子実耶花、林優衣、中村杏奈、茂木彩野。一年生・井田優香（以上二十名）

(7) 豊栄舞

(8) 朝日舞

(9) 朝日舞

(5) かがり火の中での豊栄舞

(10) 浦安舞（扇）

(6) 舞に見入る参列者

(15) 収穫の喜び

(11) 浦安舞（鈴）

(16) 巨大いもを荷車に乗せて

(12) 上富囃子保存会『富の丹精』

(17) 式典にて名誉宮司挨拶

(13) お囃子

(18) 来賓の皆様

(14) サツマイモの苗植え

(19) 川越いも友の会会長ベーリ・ドゥエル氏

(21) 吉田浩明氏

一月十三日（土）午後七時よりテレビ朝日『鶴瓶のニッポン武勇伝』に出演します！

(20) 鋳物師鈴木文吾氏

(22)寒い中、吉田徹四郎様ご夫妻にも遷座祭にご参列いただきました。吉田家のご当主で、徹四郎様の研究が、吉田弥右衛門さんの功績の発見につながりました。

# 収穫祭行われる

十月九日（月）、当社の例祭日に収穫祭を斎行しました。吉田弥右衛門ご遷座の記念事業として春の苗植え祭に続き行われたものです。総勢百五十名の親子の皆さんにご参加いただきました。

秋晴れの中、家族そろって芋掘りをした後、それぞれが掘ったサツマイモを神前にお供えし、感謝祭を執り行いました。芋掘りを行ったご神園は、苗植え祭の時に祓い清め、春から収穫まで神様にお守りいただいておりました。

ご神園で収穫されたサツマイモを神様にご奉納し、そのサツマイモで芋焼酎のご神酒をつくる計画です。

祭典終了後、早速総代さんが蔵元である福島県の笹の川酒造まで運んでくださいました。出来上がりは五月から六月、本数は五百～六百本、名前は『富乃神明』と名付けさせていただく予定です。

家族そろって芋掘り

掘ったサツマイモの奉納

神前に感謝の玉串奉奠

笹の川酒造山口社長

(24) サツマ団子を作る三芳町甘藷同好会の皆さん

(23) サツマイモ汁を作る婦人会の皆さん

# 紙芝居の制作にあたって

三芳町立中央図書館司書　代田　知子

三芳町の図書館には、サツマイモについて調べに来る人が大勢います。「引っ越してきてから人によく芋を贈っているのだが、芋と三芳の歴史を知りたい」と言う初老の男性。宿題でサツマイモの本を借りに駆け込んでくる小学生や、夏休みの研究課題にする中高生…。

ですから、林宮司さんに「私たちにサツマイモという財産を残してくれた吉田弥右衛門さんのことを、一人でも多くの人に知ってほしい。子どもにもわかる紙芝居を作りたいが協力してくれないか？」という話をいただいたときには大いに賛同し、館長と相談の上、図書館事業として協力させていただくことにしました。

絵は、絵心があり紙芝居にも詳しい渡辺弘子さん（三芳小学校学校図書館司書）にお願いし、林さんの原稿をもとに私が紙芝居用に整えることに決定。三人で話し合いを持ちながら制作を続けました。芋作りの苦労や生産の喜びを表現したいという林さんの熱い思いが反映されたい紙芝居になったと自画自賛しています。

十一月の遷座祭では、鎮守の森に囲まれた夜の野外スクリーン上映で、これは素晴らしいと大感動。でも、紙芝居の素朴な味わいもいいものです。ぜひ紙芝居でもお楽しみください。

紙芝居『とめのいものはじまり（吉田弥右衛門物語）』

脚本担当：代田知子さん

画担当：渡辺弘子さん

川越
サツマイモ資料館
館長　井上　浩

## いも神さまのこと

中南米原産のサツマイモがわが国に伝来したのは江戸時代の初めで、まず沖縄本島に入りました。それが九州に伝えられ、そこから少しずつ北上して江戸時代の中頃には関東でも作れるようになりました。

サツマイモほど強く、たくましい作物はありません。干ばつや台風、病虫害などで他の作物が全滅しても、いもができました。おかげでそれを作るようになったところでは、どれだけ多くの人たちが飢え死にしないですんだかわかりません。

関東でのサツマイモ作りの大本は江戸の学者、青木昆陽先生で、その試作は享保二十年（一七三五）のことでした。その関東の中の武蔵野台地の「サツマの元祖」は南永井村の名主だった吉田弥右衛門さんで、その試作は寛延四年（一七五一）のことでした。

このたびそのお二人が三富富岡総鎮守の神明社に、いも神さまとしておまつりされることになりました。サツマイモ関係者の一人として心から喜んでいます。

## Q&A　神様のお話

### なぜお正月に「お年玉」なの？

お正月になると子供にとってうれしいことはお年玉を貰うことです。小さい頃は、お年玉とは十円玉や百円玉のことかと思ったりしますが、大きくなるに従って、新年の贈答一般に使う言葉だとわかってきます。では、なぜお正月に「お年玉」というのか。

正月とは、年の始めに歳神さまを迎え家族そろって祝う神祭りです。この神への供え物は丸い鏡餅を重ねて供えます。東北地方では、各家々で作る小さな丸餅を「年玉」といい、子供達に与える風習がありました。これが金銭になったのは、近年になってからのことであり、もともと「年玉」とは歳神さまに供える餅であり、そのお下がりを頂戴することが起こりです。

これを雑煮としていただくことにより、神様の恩頼（みたまのふゆ）を得て一年を無事に過ごすことができるという信仰です。だから歳神さまの代理人である一族の長老や両親などからお年玉をいただく習慣となったのです。歳神さまの霊力にふれることによって、つつがなく新年を迎えられると考えたのです。

では、歳神さまとはどんな神なのでしょうか。一般的に常盤木の松の生命に象徴される神です。正月に門松を立てるのはそれに由来します。一方「とし」の語源は穀物、とくに稲やその実りを意味しました。このことは古代の日本人が漢字を移入した際に「稔」に「とし」「みのる」という訓をあてたことからも容易にうなずけます。「としご（乞）いのまつり」といえば、春に稲の豊作を祈る祭りのことで「祈念祭」と書き、古来から最も大切な祭りとされてきました。そこからまた歳神さまとは稲の神、稲の実りをもたらす神ともいい、日本では稲は普通一年に一度実ることから、稲の実りを意味した「とし」が一年の単位を示す言葉に転じていったと理解できます。だから「お年玉」は歳神さまの霊力すなわち私達の生命を支える稲の力にふれることで、幸福を得るという信仰に由来するのです。

## 《今日の言葉》

日々を神と生きる

**さしのぼる朝日のごとくさはやかに**
**もたまほしきは心なりけり**

明治天皇御製

空高く昇っていく朝日のように、いつもすがすがしく、明るくさわやかな心を持ちたいものです。